



Title	ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯
Author(s)	岡崎, 精郎
Citation	懐徳. 1962, 33, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90376">https://hdl.handle.net/11094/90376</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯

岡崎精郎

## 一

ニコライ・アレクサンドロビッチ・ネフスキ氏 (Николай Александрович Невский) の遺稿集『Тангутская филология』が一巻の巨冊としてわれわれの前に現れたのは昨年のことであつたが、同書の出版はそれより以前、一昨一九六〇年のことに屬する。今年に入つて、本書にたいして科學部門のレーニン賞が授與されたが、このような故人への授賞は余り前例のないことであるといふ。そして本書が出版され、レーニン賞を受けるにいたつた背後には、氏の東京留學以來の友人でソ連科學アカデミー會員ニコライ・イオシフォービッチ・コントラード氏の友情がひめられてゐるといふ（大阪朝日、昭和三七年五月二七日附、秦モスクワ支局長執筆による）。本書については、さきに橋本萬太郎氏による紹介もあり（『掌中珠

のタンクート・漢對音研究の方法』中國語學一〇九、一三一—六頁、昭和三六年四月）、さらに西田龍雄氏の詳細なる批評もなされてゐるが（「故 Nevsky 氏の西夏語研究について」言語研究第四一號、五五—六五頁、昭和三七年三月）、本書こそはネフスキ氏の西夏學研究成果のいわば集大成ともいふべきものであり、四十六歳という壯年にして一九三八年、惜しくも逝去せられた氏の業績にたいし、改めて敬服するとともに、その研究の、中道にして斷たれたことが、今更の如く痛惜せられるのである。

本書の刊行と前後して、氏の選集、さらに全集の刊行計畫がソヴェト連邦において進められてゐると聞くが、この機會に氏の業績に關して全面的な紹介を試みるところに、その生涯をふりかえつてみると決して無意義ではないと思う。

## 二

氏の略歴については、さきに柳田國男氏によつて年譜が編まれてゐるが（「大白神考」柳田國男先生著作集第一卷二〇〇頁），その他の資料によつて、これを補いつつ、敍べてゆこう。

氏は一八九二年二月一八日、露國ヤロスラヴリ縣ヤロスラヴリ市に生れた。この、大ロシア人の出身といふことは、純ロシア系以外の人の少くないロシア學界人の中にあつて、氏の自ら誇りとしていたところであるといわれる（石濱純太郎博士談話）。氏の父君はヤロスラヴリ地方裁判所に勤務されていた由であるが、早く兩親を失われた氏は、やはりヤロスラヴリ縣のルイビンスク市で母方の親戚の家で祖母に育てられ、一九〇〇年、ルイビンスク市のギムナジウムに入學し、一九〇九年、同校高等部を優秀な成績で卒業して、銀メダルを受賞した。同年九月、サンクト・ペテルブルグ工藝専門學校（一に、ニコライ二世帝室工科大學院）に入學した。當時のロシアでは、音樂教育が非常に進んでいたが、氏は音樂には全然興味をひかれてなかつたといふ（高橋盛孝博士「ネフスキー氏について」日本民俗學大系第一二一、二九三頁）。一年を経て、かねての希望どおりに、中國語・日本語を學ぶべく、サン

クト・ペテルブルグ大學の東洋學部（一に東洋科和漢部）に移つた。氏はその「自傳」（前掲「Таинственная Филология」所收、H. A. Невский 小傳、C. 12 に引用せる）において、「早くから、これらの言語に憧憬を感じていた。」と記しているという。當時、中國語教授はイワノフ氏で、後年、ネフスキ氏に西夏語資料を供與した人であつた。ところが、中國語の勉強に入つて早々に、佛教史研究家のワシリエフ氏から、「中國人すら一生かかつても覚え切れぬ漢字を外國人が學ぶのは無駄だ」と訓され、一寸考えさせられたといふ。日本語部には當時、正教授が缺員のままで、幕末のころからロシアに歸化されていた黒田某先生がおられ、その日本語教科書は日本外史であつたといふ。その他には、外務省の役人で講師にみえた某氏がおられ、チエンバレンの日本語文法のローマ字をロシア風のアクセントをつけて讀ませたといふ（高橋博士前掲論文二九三頁）。一九一三年の夏休みに同大學より日本に派遣せられ、二ヶ月間東京に滞在して日本文學の研究に從事せられたが、その際、「長崎に着いてその日本人に教わつた言葉を使つたところ、町の人には通ぜず、情なかつた」由である（柳田國男氏「故郷七十年」二九〇頁）。翌一九一四年五月、同大學一等卒業證書を授與せられ、同大學教授候補者に選ばれて日本語講座に残され、同時に帝

室エミルタジニ博物館古錢學部助手となつた。氏の前途まさに洋々たるものがあつたにも拘らず、この年六月二十八日、サラエヴォに突發した凶變はひいては八月一日、ドイツの對ロシア宣戰布告に發展し、やがてヨーロッパの天地は第一次世界大戰の渦中におしつつまれた。これら一連の國際的事變は學究としてスタートした氏の前途の上に、何か運命的なものを感ぜしめずにはおかないのである。

しかし、翌一九一五年三月、氏は露國文部省より二年間の期間付で日本に官費留學を命ぜられた。同年七月、日本に到着し、「國・漢文學ならびに日本民俗學の研究」に從事されることとなつた（柳田氏年譜二〇〇頁）。ローゼンベルグ（佛教學專攻）、セルゲイ・エリセーエフ（日本文學專攻、後年ハーヴァード大學教授、退職後バーク在住）兩氏らも同様、官費留學生として日本に來られたが、一ヶ月五百圓の官費支給が使いきれぬ位であつたといふ（高橋博士前掲論文二九三頁）。しかるに二ヶ年の留學期間の満ちんとする一九一七年三月、ロシア革命は勃發し、皇帝の退位、ケレンスキイ假政府の樹立をみたが、政權交替の結果として留學費送金を停止せられたために、生活費をえんがために、東京の明露壹商會に勤務するのやむなきにいたつたのであつた。

ところで、このころ、氏は柳田國男氏に師事し始めら

れたものの如くで、一九一五年秋ごろ——といえば、東京留學後まもないころ——、折口信夫、中山太郎兩氏の紹介で始めて柳田氏を訪問し、それからはいつも三人連れで訪ねられた由で、翌年のネフスキ氏誕生日には柳田氏の方から駒込のネフスキ氏宅を訪ねておられる。なお、やはりこのころ、ニコライ・H・コンラッド氏も同道して柳田氏の教をうけられてゐる（柳田氏「オシラ様とニコライ・ネフスキ」大白神考所収、四一頁、「故郷七十年」二九六一七頁）。コンラッド氏は一九一二年、サンクト・ペテルブルグ大學東洋學部を卒業し、キエフ高等専門學校で極東諸民族の民俗學を講じ、また日本語と中國語を教えられていたが、一九一四年以來、日本留學を命ぜられ、二年間東京大學文學部國文學科で受講されてゐたのであつた（ヴェーツベト「コンラッド博士をたずねて」今日のソ連邦一九六一年二月一五日附、四號）。岡正雄氏の談話によれば、當時柳田氏御宅では折口信夫、金田一京助氏に同氏も加わつて萬葉集の研究會を開いていたが、そこにネフスキ、コンラッド兩氏が參加され、殊にネフスキ氏は言語學を專攻されただけあつて、萬葉集の解釋にも中々鋭いところをみせられたといふ（長谷川幾久雄氏「私の蒐集遍歴」一六頁に引くところ）。さらにこのころ、折口信夫、中山太郎兩氏にネフスキ氏を加えて、やはり柳田氏御宅で「風

「土記逸文」の輪講を開いておられたところ（「故郷七十年」二九〇頁）。

かくして、これより以後、氏の日本民俗學研究の成果が次々に公にせられたのであつて、一九一八年には、

- (1) 農業に關する血液の土俗（以下論文にナンバーを附ける。）

の一文が「土俗と傳説」（牛島軍平編輯發行・文武堂書店刊行）一卷一號（一八一—〇頁）に出され、これは日本の場合を取り、とくに風土記の記事を中心とした研究で、臺灣の習俗などをも參照したものであるが、その冒頭に「露國留學生ねふすきい」の署名がある。なお、同號表紙には遠野の獅子踊の寫眞があり、これはネフスキ氏の撮影になるものであるが、續く二號には

- (2) 遠野のまじなひ人形（一五一一六頁）

の一文を寄せ、三號には

- (3) 相模の獅子舞の歌（一九頁）

と題して神奈川縣津久井郡島屋村のものを採り上げ、さらに同號には

- (4) あづなひの罪（五五頁）

と題して、あづなひの罪をロシア民族の舊習と關連的に説き、問答體の形で記されているが、やはり同誌同號にはオレスト・プレトネル氏の「Rusalka（自殺者の靈魂

？」と題した記述があり（二六一一八頁）、Rusalkaとは古代スラヴ傳説の水と森の妖精であるが、この一文にはネフスキ氏の驥尾に附して書いた旨の斷書があり、さきのコンラッド氏の柳田氏訪問・研究會參加の件とともに、この當時におけるロシア人留學生らの日本民俗乃至民俗學への關心の程を窺わしめよう。

翌一九一九年五月、小樽高等商業學校のロシア語教師に囑託せられた氏は任地に赴き、一九二二年に大阪外國語學校に轉するまでこの地にあり、その間、増毛の網元萬谷氏の磯子嬢を娶られたのであつたが、この赴任の年から柳田國男氏に宛てた質問狀乃至レポートが書翰の形で若干殘されている。これらは柳田國男先生著作集第一冊「大白神考」に收められているが、氏の研究對象はまずオシラ様信仰に向けられ、北海道から往復の折にはよく相馬の高木誠一氏を訪ねて、オシラ様の研究をされ（「故郷七十年」二九七頁）。さらに佐々木喜善氏と人力車を連ねて東北の村々を廻つてオシラ様の調査をされた（高橋博士前掲、二九三頁）。オシラ様とは東北日本的一部に行われる信仰現象で、ことに岩手・青森二縣では、舊い家々に傳えられた一種の祭具で、普通二本の木の執物（とりもの）の上端を、色々の布片を重ねて覆い包み、しばしばこれに人の顔を描き又は彫刻したものをおシラ

様、稀にはまたオシラボトケとさえ呼ぶものがあり、これに基いて大白神もしくは白山神などの文字を使つてゐる人折にはあるといわれる。このいわゆるオシラ様を手に執つて、神意を問い合わせたものが、曾ては家々のアップ（主婦）であつたことは、もはや歴然たる痕跡もなく、僅かに童幼の嬉戯の中から推測する他はないが、幸いにして他の地方の、專業巫術のまだ十分に盛行しない村々の類例を引きくらべることによつて、少しづつ以前の實状を復原する見込がついたと柳田氏は説かれ、そして最初にその暗示をもたらしたのは、實にネフスキ氏その人であつたと述べられている（「オシラ様とニコライ・ネフスキ」二八頁）。「大白神考」に收められた氏の書翰は、一九一九年九月四日附のものを初めとし、一九二一年四月一三日附のものを以ておわつてゐるが、一九二〇年三月二六日附書翰（「大白神考」二六六—二七七頁）でオシラサマとシベリア・シャーマンとの比較を行ふ（但し、

心をよせた書翰を集録せられたあとで次の如く結んでおられる。「十何年かの日本生活に於て、ネフスキ君の壯學徒でもまだ省みなかつたものが色々あるが、わけてもオシラ様の問題などは大きな印象であり、又深い關心の的であつたことは、ここに存録した數道の書翰からも推測し得られる。それを本國に携へ還つた後に、如何に活用し又は成長させ、且つその所得を同學の間に如何に分配したであらうか。私はもうそれを確かめる機會を持ち得ないとしても、いつの時にかまはりまはつて、日本にも其結果が傳はり、彼と袂を分つてからこの私の一國限りの研究と、比べ合せて見ることの出来るやうな、楽しい文化の交流期が出現することを切望せざるをえな」。（「オシラ様とニコライ・ネフスキ」四二一三頁）。

### 三

一九二一年四月、大阪外國語學校のロシア語教師に任命された氏は、小樽を去つて大阪へ赴き、一九二九年八月まで同校に勤め、その傍ら、一九二三年八月よりやはり二九年八月まで、京都大學文學部嘱託として史學科副科目的ロシア語を講ぜられた。外語では一年生の初めからロシア語ばかりで授業されたが、京大の授業では、

「君たちは本が讀めさへすれば宜いのだから」と、日本語ばかりで授業され、文法は比較言語學上よりみたロシア語が一時間、ロシア語文法が一時間だけで、すぐトルストイの短篇、チエホフの短篇、翌年にはプロッホの詩、ロシア譯のジョウジアの劇などを用いられ、實に行き届いた授業ぶりであつたといふ（高橋博士前掲、二九四頁）。

外語就任より以後、一九一九年の歸國まで、八年にわたる大阪生活が始まるが、氏の學問生活もここに大なる轉換をとげることとなつた。すなわち、從來の日本民俗學研究の上にさらに、大阪を足場として研究が進められることとなつたのであつて、一九二三年六月、石濱純太郎、高橋盛孝兩博士とともに大阪外國語學校の中に大阪東洋學會を結成せられたが、やがては氏の業績がこの會より發刊せられることとなるのである。さらに一九二七年七月、石濱、高橋兩博士、淺井惠倫氏、笛谷良造氏とともに靜安學社を發起して幹事となられたが、同學社は發足より以來、大阪市東區豊後町にあつた懷德堂の小講堂を會場として毎月の研究例會を行い、戰前戰中の大阪における東洋學研究者の據りどころとなつていた。「靜安學社一覽」（昭和二六年刊）にのせた靜安學社緣起に左の如くある。昭和二年春夏の際、高橋盛孝同好會合して學術を商榷するの議を主唱す。ニコライ・ネフスキ、石濱純太郎

之に賛同し、相會して學會創立の案を立つ。適々我等の仰望せる王靜安先生邊に大節を完うするに値ふ。乃ち先生を記念して學社の名を定め、以て景仰の意を明にする。秋九月二十五日を以て第一會を發して靜安學社成る。此を創設の縁起と爲す。

すでにこれよりさき、一九二五年夏、ネフスキ氏は北京に赴き、王國維氏に面會されてより、王氏に傾倒しておられ、ここに靜安學社の名を擇んだのは、氏の首唱に基いたものであつたといふ（石濱博士談話）。さて、關西、とくに在阪諸學者との接觸は氏の研究活動に大なる影響を與えずにはおかなかつたのであつて、氏の西夏學研究も實にこの接觸の間に端を發したものであつた。つとに、「コズロフ蒐集」（東亞研究五一四・五、大正四年）において、コズロフ・コレクションに注目され、さらに「西夏學小記」（支那學一卷三號、大正九年）およびその續篇（同誌三卷二號、大正二一年）において、西夏學の展開に注目されつつあつた石濱博士は、氏にたいしてソヴェト連邦所在資料を驅使することによつて、西夏語研究を推進すべく勧奨せられたが、一九二五年夏、北京へ旅行した氏が、イワノフ博士から西夏語研究資料を入手したことは、西夏學發達史上、きわめて重要な事項であり、それは後年、氏自身特筆せられてゐるところである（「西夏語研究

小史」北平圖書館々刊四卷三號)。

もとより、從來の日本民俗學研究はこの後も依然として推進されたのであつて、日本の古語、古俗を調べるには、東北地方と西南諸島を調査すべしとの大方針を夙に樹てられていた氏は、大阪赴任ののち、二度までも南方

調査の旅に出られ、一九一七年には臺灣に赴いて曹(ツオウ)族のフィールド・ワークを試みられたが、この研究

成果は後年まとめられた(後述)。臺灣旅行ののち、布施の田舎家に住まれた氏は、屋内に蛇を飼い、蛇はロシアにはいない、きれいなものだといつて珍重せられ、蛇のアルコール漬を部屋におき、蛇皮の靴をはき、蛇皮の杖をついておられたという(石濱博士談話)。さて、南方の調査報告として、一九二六年一七年にかけて、民族一卷三號(一七一三〇頁)・一二卷一號(三七一五三頁)に

(5) アヤゴの研究二篇

を分載せられた。アヤゴとは宮古島の戀歌のことであるが、引續き同誌一二卷四號(一五三一六二頁)に

(6) 宮古島子供遊戯資料

をせてある。のちに、宮古うた六〇篇(これはアヤゴとは別のもの)許の研究論文草稿としてまとめ上げられ、新村出博士より學位論文として提出すべく勧奨せられたのも(石濱博士談話)、その着手せられたのは恐らく同じ

ころであろう。ネフスキ氏が宮古島から歸られた際、その調査報告を聽かれた柳田氏の記されるところによれば、宮古島の言葉は大體三系統に分たれ、

(A) R音をZ音に發音するもの。

(B) Rの代りにLを用いるもの。

(C) 普通に沖繩あたりで使つているように、ドロップ(落音)するだけのもの。

となるが、この三系統の交錯・共存がいかにして成立したかという點に關心を抱いたネフスキ氏は大變苦勞してノートをとられた。氏は耳が少し遠いにも拘らず、巧みに聞き分けられ、そして仕分けが極めて優れておられたといふ(「故郷七十年」二九五六六頁)。さらに一九二七年には、「音聲の研究」(音聲學協會、東京)第一輯に、

(7) 琉球の昔話鶴の話の發音轉寫

をのせられている由であるが、これはなお參照の機會をえていない。一九一八・二九年ごろ、氏は京大において、ロシア語の講義の他に、アイヌ語、さらに沖繩方言に関する講義を行われた由であるが(三品彰英博士御教示)、沖繩方言の講義のものになつたものは、ネフスキ氏歸國の際に廃されて現在、藤澤の長谷川幾久雄氏の所蔵になつてゐるノートであつたらしく、本ノートはその寫眞が東大服部四郎教授のもとに委託せられてゐるという(「故郷

七十年」二九四一五頁)。柳田氏はネフスキ氏の、日本の學界のために盡された仕事の一つとして、沖繩の言語の研究をあげられ、日本語と沖繩語とが同じであるといふとの證明に數字などを使い、「主として首里とか那覇とかのおそろしく變化した言葉の形と、京都あたりの言葉とを比べるやり方にはどうも同意出來ぬのにたいして、ネフスキ氏のやり方は、現地へ行き、現在の言葉が、何年何月ごろのどこではこれこれという風な報告をしており、非常にほかのゆかぬ仕事だが、その功績は無視出来ない、日本語と沖繩語とが共通であるという結論は兩者同じでも、それを導き出す方法には歸納の方が演繹よりも妥當であるとつけ加えられている(同右、一九二一三頁)。

この他、一九二七一二八年にかけて、「民族」誌上に、

- (8) 美人の生れぬわけ(三七年、二卷二號、一五六一七頁)  
 (9) 月と不死(若水の研究の試み)(一)・(二)(二八年、三卷

二號・四號、一七一二四頁・四五一五二頁)

の民俗學研究論文二篇をのせられており、後者は若水の研究として注目すべきものであるが、さらに同誌一卷四號(一〇一一六頁)には

(10) 故シュテルンベルグ氏—其小傳と著作—

の一文をのせておられる。同誌同號にはなお、石田幹之助教授の「シュテルンベルグ教授の訃」の一文を收めて

#### 四

以上の如く、大阪轉任を機として、氏の研究領域は一段と廣まり、東北民俗の研究から進んで西南諸島の民俗・言語の研究へ及んだのであつたが、さらに氏の研究の中で特筆さるべきものは西夏語資料をめぐつてのものであつた。その第一著作はさきに述べた大阪東洋學會から亞細亞研究第四號として刊行せられたのであつて、

(1) *西夏文字抄覽* XXXIX. pp. 85.

字對照西夏文字抄覽

がそれである（一九二六年三月一五日刊行）。本書は前年の夏、北京へ赴き、イワノフ博士を訪ねて將來された西夏語資料——イワノフ博士出版の對譯觀彌勒上生兜率天經をはじめとする、チベット文字を附した西夏佛典——を活用されて成つた業績にして、これら佛典は表音文字のチベット文字を以て西夏字の發音を注してあるから、西夏語の音韻を論ずるには不可缺のものであつた。同書の自序は一九二五年一二月附であるが、石濱博士の同書序文に、「今歴山（ネフスキ）君がこれ（西夏佛典）に出てゐる文字を編纂して一の發音字書となし世に貽るは蓋し西夏音韻學の基礎を築くもの」むせられてくる（四頁）。引續き、一九二六年一月には内藤湖南博士還暦記念論文集に獻呈すべく、

(2) 西夏助辭攷略

の一篇を物され、同稿は一九三〇年にこだつて、「内藤博士頌壽記念史學論叢」（四三九一四五一页）に收められ、今回そのロシア譯が前掲書（T. F. c. 140-152）に載せられてくるが、それは前記新資料の他に、西夏譯法華經第七卷を羽田亨博士より借覽參照されて成つたものであつた。やみに翌一九一七年にな。

(3) Concerning Tangut Dictionaries

ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯

を著され、これは一九三〇年刊行の「狩野教授還暦記念支那學論叢」（一七一四一頁）にのせられ、これまたそのロシア譯が前掲書（T. F. c. 95-106）に收められたが、

これはイワノフ博士提供による「同音」「文海雜類」「文海」など、西夏人の手になる音韻書を紹介せられたものであつた。やはり同年、石濱博士との共譯になる、

(4) 西夏文般若經の斷片（藝文一八卷五號）

が發表せられたが、やはり同年、氏と石濱博士の共譯で、ペリオ・コンクション中の、

(5) 西夏地藏菩薩本願經殘紙

が「典籍の研究」（大阪・玉樹書店刊行）六號に出され、それは大正藏經第一三卷（七八六頁中二八行一十—三行）に相當することが證せられた。

以上の諸業績と相まつて、ひのひむ、西夏語辭典作成の仕事は着々とすすめられていた。前年、北京でイワノフ博士より入手された資料に加えて、一九二八一二九年ごろにはレニングラードのアジア博物館のロズロフ・コレクション・オルデンブルグ（S. F. Oldenbourg）、アレクセーエフ（V. M. Alexieff）兩氏によつて利用の途が開かれていて（ネフスキ「西夏語研究小史」三九九一四〇〇頁）、これら資料に基きつゝ、西夏對音字彙を増補した稿本ノートは作成されつゝあつた（石濱博士「西夏語研究の話」東

洋學の話所收（一九八頁）。それに收められた語彙の數は、今回出版の書物に收められたものよりは少かつたようだといわれており（石濱博士談話）、このノート二冊の稿本は氏の歸國に際して、石濱博士の御手許に留めおかれたのであるが、誠に殘念なことに、他人に借出されたまま、現在行方不明となつてゐる。なお、同稿本の巻尾には、“Innermost Asia” Vol. III. (CXXXIV~CXXXVII) のカラホト出土西夏文書の、B. Laufer の手になる注釋にたゞする訂正が施され、それは、チベット文字の注音を附した西夏文字五百以上にわたるもので、この部分のみは氏の歸國に際して東洋文庫に寄託せられたといふ（西夏語研究小史）（三九八頁）。結局、同稿本ノート二冊は氏の歸國に當つて残置され、氏としては歸國後別に改めて稿本を作成し、それが今回出版せられたものとみるべきであろう。

あらにこのころ、アジア博物館から數多くの西夏文佛典の寫眞がもたらされた中に、チベット文より譯出された西夏文經典があり、それはオルデンブルグ氏によれば、「五部經」(Panča-rakṣa) の一であるといふが、氏はその全文を三部に分ち、その第一部分を日本文に譯出し、注を附されたことを自ら記されている（西夏語研究小史）（三九九~四〇〇頁）。同稿本の成つたのは氏の歸國直前、一

九二九年中のことの由であるが（石濱博士談話）、しかし、同稿本もまた今日その所在の明かならぬのは遺憾である。ともあれ、歸國前の一二年間のネフスキ氏の努力はすさまじいものがあり、殊に西夏語の研究になると精魂を盡しておられたと傳えられてゐる（石濱博士「西夏語研究の話」（一九八一九頁）。ネフスキ氏の歸國事情は詳かでないが、柳田氏によれば、地位が不安なので、歸國して正式の地位を得んとされたものであろうといわれる（故郷七十一年）（一九一頁）。氏自身が「西夏語研究小史」（三九八頁）に記されてゐるところによれば、一九二九年秋に歸國の準備をせられた由で、恐らく同年中に歸國せられたものであろう。因みに、大阪外國語學校には同年八月まで勤められており（精松源一教授の御調査による）、京都大學も同月末まで在職せられてゐる（西田龍雄氏の御調査による）。なお、夫人は同伴されず、後から入國手續をして赴かれたという（石濱博士談話）。

さて歸國草々に氏はソ連邦科學院において、西夏語に関する研究發表を行い、科學院會員にして有名な東洋學者であつたベルトリド（B. Бартолид）教授の絶賛を博されたといふが（石濱博士談話）、この後、石濱博士と共に陸續と業績が公にせられた。すなわち、一九二九年に、

- (16) 西夏語譯大藏經考（龍谷大學論叢第二八七號、一八一  
二五頁。周一良氏による漢譯は北平圖書館々刊四卷三號所  
收、一九三二年刊行）

を出されたのをはじめとして、翌一九三〇年には  
 (17) 蕃漢合時掌中珠（書評）（史林一五卷一號、一九三〇  
年一月）

が書かれ、さらに一九三一年には  
 (18) 西夏文八千頌般若經合璧考釋（北平圖書館々刊四卷  
三號、二四七—二五八頁）

を出され、續いて翌年には  
 (19) 西夏語譯大方廣佛華嚴經入不可思議解脫境界普賢  
行願品（マニーラ、一九三三年一二月。本論文では廣瀬督  
氏も共著者として名を連ねられている。）

が公にされたが、マニーラ誌の論文はなお目睹の機會を  
えていない。別に、西域考古圖譜下卷、西域語文書<sup>(2)</sup>の  
 (3)・(4)の不明語文書断片を譯出して、

(20) 于闐文知炬陀羅尼經の断片（靜安學社叢稿）（龍谷大  
學論叢三〇二號、一一一三頁、一九三二年五月）

を公にされたが、これはさきに靜安學社第七回集會（昭  
和三年五月二七日）において發表せられたものをまとめら  
れたものであつた。

一方、ネフスキ氏個人で發表されたものとしては、前

「北平圖書館々刊」四卷三號に、

(21) 西夏國書殘經釋文及び類林釋文(二四一—六頁)

蘇我研究  
完距州博物館藏西夏文書籍目錄二則（三）

六七一三七七頁

翌一九三〇年には、  
著「萬葉詩注口味」(書評)、(史林一五卷一號、一

(11) 蕃漢台時掌中珠（書語）（史林一五卷一號一九三〇

年  
一  
月

が書かれ、さらに一九三二年には

(18) 西夏文八千頌般若經合璧考釋（北平圖書館叢刊四卷

三號、三四七—二五八頁

三經二四七二五八更

を出され、續いて翌年には

(19) 西夏語譯大方廣佛華嚴經入不可思議解脫境界普賢

行願品(マユーラ、一九三三年二月。本論文では廣瀬督

名題中之「一」字，即指此「一」。

氏も井著者として名を連ねられている。)

が公にされたが、マユーラ誌の論文はなお目睹の機會を

別て、西域考古圖譜下卷、西域語文書22)の

卷之四 塔記

(4) の不明語文書断片を譯出して

于闐文知矩陀羅尼經の斷片（靜安學社叢稿）（龍谷大

學論叢三〇二號，一一二三頁，一九三一年五月（

學論叢二〇二號  
一一一頁  
一九三一年五月

を公にされたが、これはさきに靜安學社第七回集會（昭

和三年五月二七日）において發表せられたものをまとめられたものであつた。

一方、ネフスキ氏個人で發表されたものとしては、前

《Известия Академии Наук СССР》' отлечение обще-

ственных наук, 1931).當時の西夏學史として貴

重に扱われた(本論文ロシア文も前掲書(T. Ф.)を参考。C. 19-32)。これは一九三一年に

(2) 西夏國名考 (О наименований Танутского го-

сударства. «Записки института востоковедения

Академии Наук СССР», Т. II, вып. 3.)

が發表され(本論文も前掲書(T. Ф.)に收められ。c. 33-51.)、

これに加えて同年に、  
西夏國名考補正(龍谷大學論叢第三〇五號、一一一二

頁)

の一篇が石濱博士と共にせられたが、これは王靜如氏の「西夏國名考」(歴史語言研究所單刊甲種之八・西夏研究第一輯所收、七七八八年)の中、とくにその中の白彌という名稱に関する考證の批判であつた。わんに數年の間に、

(26) 西夏文字といふの萬葉語(Тангутская письменнос-  
ть и ее фонлы. «Доклады группы востоковедов  
на сессии Академии Наук СССР 20/III 1935 г.,  
M.-L. 1936.)

が公にされ、本論文も前掲書(T. Ф. c. 74-94.)に收められてゐる。本論文におこなは、西夏人の詩集の他に、

西夏人の創作にわたるもの。

1、徳行集(сборник доблестного поведения)と稱

せられる。

2、聖立義海(море начерганий)

3、占星書

4、醫學書

5、法律書

6、賢智集(Изречения)と稱せられる。

など)の、ソ連東方學研究所(やまとアジア博物館)の資料類をあげてある。「聖立義海」は五冊から成る西夏の百科辭典で、内容は十五篇より成つていたところが、その一部しか現存してゐない。「賢智集」とは格言集で、その一つは一七六年に梁德養(漢人か)が口頭傳誦の格言をまとめ上げたもので、他の一つは王仁持(やはり漢人か)が由口の格言を編集して、一七八七年に出版したものであるところ。法律書としては、やまと「目錄」にあげられた「天盛年變新民制學」の他に「光定王申新法」のあらじが調査せられており、醫學書としては、紫苑丸(Aster tartaricus)などの丸薬の處方を記したテキストなどがある他に、占星書としては、骨勒(Yu-lo)部の仁壽(じゆう)一一八三年に作られた「大陰五星集」(сборник гадани пяти планет)と呼ばれるテキストがあ

り、また未來の子供についての占いや、鳥の叫び聲についての占いを書いた寫本があり、それらの記述には、中國の占術からの影響を感じしめるものがあるといふが、

鳥の叫び聲の占いの如きは、チベットの鳥占いとの關連を考へしものであつ（B. Laufer, Bird divination among the Tibetans. T'oung pao, 1914）筆者がさきに論めた西夏の占いに關する考察（「西夏の民族信仰について」古代學五卷一號、一一一—一頁）にこれら新資料を加えて検討し直されねばならぬ。

以上はネフスキ氏生前に發表せられたものであるが、その他に多くの遺稿が歸國後の業績として殘されており、今度その中から前掲書（T. F.）に收錄されたものとして次の諸篇があげられる。すなわち、

(2) 十一世紀西夏國における天體崇拜について

(Культ небесных светил в Тангутском государстве XII века.) c. 52-73.

(3) 西夏語韻研究に對する諸資料 (Материалы для изучения Тангутского произношения.) c. 107-131.

(4) 西夏語の韻圖 (Тангутские Фонетические Таблицы.) c. 132-139.

(5) 語彙・文法語資料 (Лексико-Грамматические Материалы.) c. 153-162.

■ ネフスキ氏の業績と生涯

があり、やうに本書の大半（第一部、c. 167-601. と第二部全體、c. 5-666.）を占める。

(3) 西夏語字典 (Тангутский словарь.)

がある。これは星宿について詳述したものであるが、西夏の星宿について、淳祐天文圖など宋代の星宿（歐内清博士「宋代の星宿」東方學報第七冊、四一一八九頁參照）との比較研究が必要であろう。④では西夏音研究の資料を(A)西夏・漢語（の音對照）資料、(B)西夏・チベット語（の音對照）資料、(C)純粹の西夏資料に三分されて、夫々解説されたものであり、「同音」「文海」「文海雜類」「文海寶韻」などの韻書が紹介されたが、⑤では以上の韻書と性格を異にする「五聲切韻」なる韻圖をとり上げてある。しかし、これらの韻圖韻書を組み合はせることによつて、果して西夏語の音素體系をわくづけ得るやにつけば、西田龍雄氏の批判を聽かねばならぬ（前掲「故 Novsky 氏の西夏語研究について」五九一六〇頁）。⑥におこつては、七つの單語——土耳古玉・藥・森・李・葡萄・土と砂一塵・蓮華——に考證を加えて、B. Laufer の諸論文にみえた見解を發展させ、なお、形容詞、代名詞、數詞について略説してゐる。⑦の「西夏語字典」の體裁は、一つの西夏字にたゞして、(A)漢字による音表記とその中國音、(B)チベット文字による音表記、(C)ネフスキ氏の推定音、(D)

夏字にたゞして、(A)漢字による音表記とその中國音、(B)チベット文字による音表記、(C)ネフスキ氏の推定音、(D)

「文海」・「文海寶韻」の韻類および文字ナンバー、(E)「回音」の歸屬類、(F)漢譯（じきにはチャム・譯る）、(G)英譯ヒロシタ譯、(H)使用例、(I)親近言語形の指摘などが附せられてくる。（尤も、文字毎に以上すべてが満たされしまるわけではなく。）本字典は氏の遺稿ノートを寫眞複製したものであり、故人としては未だノートのままや十分整理されていないままで公にされることは不本意であろうけれど、かかる重要な研究成果を公にせられたことは、それ自體、西夏學發達史の上に一時期を劃するものである。

以上みて來たように、氏の西夏學研究は歸國後も着々と進みられてきたが、さらにその他の面においても逐次發表を續けられてきた。それらの多くはなお目睹の機會をえられながら、一九三四年にはコルバクチー（E. M. Колпакчи）氏と共著で、  
 (3) 日本語—初級コース—(Японский язык (началь-  
ный курс), изданье Ленинградского восточного  
института.)  
 を出された他に、オルデン・ドルダ記念論文集に、  
 (33) 虹語源考(Преложение о рапорте, как о не-  
бесной земле.—《Сергего Федоровича Ольденбу-  
ргу к пятидесятилетию научно-общественной

деятельности 1882-1932).с. 367-376.  
 の一篇を寄稿してあるが、オルデン・ドルダ記念論文集にてはついに石濱博士の御紹介がある(東洋史研究一卷二號、四〇—四三頁)。司續き、翌年には、

(34) 六一八世紀、古代日本の儀禮的詩歌(祝詞)  
 (кульботовая поэзия древней Японии (VI-VIII вв.) (Норито). Перевод с японского, вступление иная статья, примечания,—《Восток》, кн. 3, м-

л., 1935. стл. 15-30.

(35) Таймの此間傳承(Айнски Фолкlore. Перевод, вступительная статья, примечания. Там же.)  
 の二篇を出された。前者については、東京滞在時代よりた氏の日本柳田國男氏を中心とする研究會その他にゆて推進され古代文學研究が、萬葉集、風土記よりからて進んで祝詞に及んで行つたものとみると、後者については、すでに小樽滞在時代より關心をもたれていたものとみゆくを以て、なお、タイム語については京都大學で講義せられたのであつた(前述)。アルビ、"T. O." 第一部(c. 15.)にのせたネフスキ氏著作目録によれば、  
 (36) Построенный словарь к японскому рассказу.  
 《Переводной пост》, изданье Ленинградского восточного института, б/г, б/м,

33. Построенный словарь к японскому рассказу.

«Старуха повесилась», издание Ленинградского

восточного института, б/г, б/м.

○ 11 篇の日本民謡の翻語辭典が出され、その刊行年次は詳かでないが、やはり前記論文と一連の述作とみなされよう。但し、この 11 篇の日本民謡の内容は詳でなく、<sup>36</sup>の民謡のテーマは「前の官」の意、即ちそれは「首くへる老婆」の意であるが、民謡の實體が明かでないのや、日本の何處の民謡なのか突止められるのは遺憾である。

同上、一九三五年には、

33. やベロヴォーもつゝ連く (十月の日本語) (От «Московии» к СССР (Октябрь и японский язык), —

«Записки Института востоковедения Академии наук СССР», т. V, м.-л., с. 42—53.

が發表された。本論文はまだ題してあるが、内容が不明であるが、K. A. Popow, Bibliographie der Arbeiten sowij. Wissenschaftler über das Japanische. (原文はハント文の翻譯) (Z. D. M. G., Bd. III-Heft I, 1961, S. 156) によれば、„Sprachgeschichte“ に屬する類性を持つ Moscowien (Moskowija) である、veralte, von Ausländern gebrauchte Bezeichnung für

Russia”であるから。

たゞ、やはりの年には、

33. 蕃族方言叢書 (Материалы по говорам Юго-Востока СССР), Т. XI, М.-Л., стр. 136.

が出版された。高砂族のツオウ族は阿里山及びその附近に住み、狩主農從の生活を營み來つたもので、ツオウとは人間の意であるところ (増田福太郎氏「原始刑法の探求」八頁)。ツオウ族の言語研究は淺井惠倫氏の懲懲になるので (高橋博士「ネフスキイ氏」として) 一九一七年、臺灣に赴いて調査された結果をもとにまとめ上げられたのであつた。淺井惠倫氏は「臺灣言語學はひじきで進んだか?」(民族學研究一八卷・一二號) の題する論文において、「臺灣語を研究した異邦人として、Otto Scheerer (1938死) の次にネフスキ氏をあげること」、ネフスキ氏は「がなる音でも眞似ることが出来、蕃族の言葉を音字を以て直ちに筆記出来たと記されてゐる (同上、一四頁)。本書の引用文献はヴァラチャチーに富み、言語關係、臺灣蕃族慣習關係文献は無論のこと、柳田國男、松岡靜雄、兩氏の述作、さらに栗田寛氏「古風土記逸文考證」(東京、一九〇三年) にも及んでおり、「風土記逸文」は柳田氏御座における輪讀會より以來、氏の手がけられた

ものであつた。このことは、氏の言語學、このことは、民俗學研究における獨特な方法を窺わしめるものであろう。以上、氏の歸國後の業績を通觀してみると、西夏學並びにその他の方面の研究をも含めて、氏の生前における發表は一九三五・六年のころを以て終を告げ、一九三八年逝去せられたのであつた。

## 六

ネフスキ氏は日本からの歸國に際して、それ迄書きためられたノート類、カード類を藏書とともに夫人の實家に預けられた。何故にこのようにせられたのか、その間の事情は判らない。ところで、その資料類及び藏書を收めた大型トランクは種々の事情のために、小樽の古本屋の手に入り、それが拓植銀行におられた長谷川幾久雄氏の收藏されるところとなつた。その經緯については長谷川氏が詳しく述べてゐる（私の蒐書遍歷」一四頁以下）。

長谷川氏はネフスキ氏舊藏書の中、ロシア語のものを除いて目録を作られているが、筆者は未だ見ていない。しかし、長谷川氏が前掲書の中に紹介されてゐるところによつても、特殊なコレクションとして注目されるべきものと思われるが、さらに重要なものは殘された遺稿ノート數十冊であつて、その主なものは西夏語と日本古語に關す

るものであるといわれ（本年四月一七日附、長谷川氏の筆者宛ての御來信による）。その中で沖繩方言に關するノートは寫眞に撮られたが（前述）、その他にも、日本に留めおかれた西夏語字典の下書きと考えられるものも含めて數多くのノート類があり、今後の研究資料として活用されることを切に願うものである。

さらに、歸國後の氏の業績の中、西夏學研究に關した論文九篇は西夏語字典とともに前掲書の中に收載せられたが、その他にも、「氏の筆になつた、多くの學問的に非常に興味のある勞作が今なおその發表を待つてゐる」と傳えられる上に（З. И. Горбачева, Н. А. Невский как Тангуловед. с. 10-11. 前掲書所收）、西夏學以外の研究業績にいたつては、發表済みのものでも今日殆んど見ることの出来ない現状においては、小篇冒頭にふれた、ネフスキ氏の選集、さらには全集の刊行計畫が達成せられんことを切に期待するものである。その際には、日本に殘された資料類も併せて検討さるべきであろう。

さらに、ネフスキ氏が銳意調査をすすめられたコズロフ・コレクションはその後、東方學研究所において、コルバチーバ女史らによつて、整理が續行されて登録番號も附せられてゐるが（З. И. Горбачева, Тангульские

Академии Наук СССР. с. 67-89. Ученые записки  
Института востоковедения ТОМ. IX, 1954.) 整理済  
みのものから眞實はこゝ公開して頂いた。かくすれば  
ひとつによつて、西夏學研究の途はさらに大きく開かれる  
であろうことを期待しつつ、筆を擱くものである。

=コライア・ネフスキ氏の著績と生涯正誤表

七四頁下段十三行

は  
た  
氏  
の  
日本

下  
行  
推  
進  
さ

七六頁上段一行

このことば、氏の言

語

学、このことは、民  
政治研究

前

る